

# ツイッター小説



201101 春昼

エジプトの反政府デモに影響を受けて、日本でもフェイスブックをきっかけに反政府デモが起きた。フェイスブック、ツイッター、グーグル、YouTube、Ustreamといった外国生まれのネットの情報ツールが、デモの拡大を支援した。結局、アメリカに有利な新政権が誕生した。

ジェットコースター以上の速度で暴走した自動車が、30代の人間を轢き殺した。ジェットコースターで人身事故が起きた時は、遊園地の社長が謝罪会見を開いたが、機械の欠陥を原因としない自動車事故で罪を問われたのは、運転手のみだった。

人間は牛や豚や鳥の肉を240円とか低価格で食べているが、人間そのものの肉は、他の動物に食べられることはない。人間は食物連鎖の頂点に立っていると思っていたけど、違った。人間の肉は悪魔が食べているのだと、昨日天使が教えてくれた。悪魔に食べられないように気をつけよう。

実家に帰省するため上越新幹線に乗った。長いトンネルが続く。10時間以上トンネルの中を走っている気がする。いつもならもっと早くトンネルを抜けて、雪が降る湯沢の駅に着くのに。...長い長いトンネルを抜けると、そこは北朝鮮だった。

上越新幹線の車両に北朝鮮の兵士が現れる。つたない日本語で状況説明された。僕らが乗っている新幹線は、北朝鮮にハイジャックされたらしい。新幹線のトンネルは、北朝鮮が秘密裏に作成した日本海海底トンネルにつながっていた。新幹線の帰省客全員が、北朝鮮に拉致された。

昨年（2019年）の12月24日、サンタクロースは、北朝鮮の飢餓に苦しむ村も訪ねていた。食事にも困っている子どもたちにプレゼントを届ける。日本の多くの家庭も小学校の給食費を払えていないが、北朝鮮の飢餓はサンタを必要とする。

朝目覚めたら、東京のビルが全て爆破されていた。勤め先の会社のビルも爆破され、瓦礫の山に変わり果てている。僕は瓦礫の中で自分のミニノートパソコンを起動し、仕事を始めた。同僚も次々出社してくる。みんなノートパソコンやスマートフォンを広げて仕事をする。今日も多忙は続く。

僕の部屋に宇宙人が三人やってきた。一人目は、日本人全員を抹殺するという。二人目は、地球人全員を抹殺するという。三人目は、宇宙を滅ぼすという。僕は、三人の提案から一つ選択して、受け入れなければならない。最善の選択は何か考えた僕は、宇宙人三人と戦うことにした。

車に乗ったら見知らぬ女性が座っていた。赤いワンピースを着て銃を持つ彼女は、かつて僕が見た中で一番というほどの絶世の美女だった。彼女は、日本人をこれから全員抹殺するという。もし僕一人が今ここで撃ち殺されるなら、日本人全員の抹殺を免除してもよいという。僕はどうすればいい？

昨日の夜、眠っている時に夢を見た。夢の中でも僕は眠り、夢を見ていた。その夢の中でも、僕は夢を見ていた。その夢の中でも、僕は眠って夢を見ており、さらにその夢の中でも、僕は眠り夢を見ていた。僕は一晩のうちに、100人分の夢を潜り抜けた。これも夢の中の眩きかもしれない。

夢の中で私は、男になっていた。男となった私は、女である私自身と体を重ねていた。男の私が、自分自身を抱きしめている。男となった私は夢の中で、女の私の首を絞めて、殺していた。女の私が死んだ時、私は目覚めた。私はこれから現実でも、男として生きるのかもしれない。

僕は今、自分の少年時代を再現するテレビゲームで遊んでいる。僕の脳の中に眠る少年時代の記憶が、ゲームとして再現された。死んだ両親は少年時代の姿で復活しているし、ゲーム画面の中にいる僕の分身は幼なかった。僕は孫と一緒に、このテレビゲームに没入し続けた。

空から神様が大量に降ってきたので、今日は運動会中止です。運動会は、神なき世界となる明日に順延です。

「1番じゃなきゃだめですか？」という政治家の発言が批判された。科学の世界では、1番じゃなきゃだめだと言われる。何故か。最高の品質、成果を目指すこと＝1番を目指すことになる。他人と競争することが目的なのではない。1番を目指すとは、最高品質の追求なのだ。

どちらを選べばいいかなかなか決められないとする。

優柔不断？

決定不可能性？

どちらか1つに決められないなら、決めなくてよいのだ。さらに上を目指せばいいのだ。1つ上のレベルで、別の選択肢が待っている。そこでまた選択すればよい。その時も決められないなら、また1つ上へ。

誰か一人に決められないから上へ上へ、まだあるまだあると延々先延ばし。こうしていると、婚期を逃す。けれど逃げるがままにしておくのもよし。その人の人生には、一人でいる時間が必要だったのかもしれない。決められなければ、無理して決める必要はない。上へ上へ。別のことに集中。

目の前には恐怖と、将来に対する不安と焦りしか見えないという時、実際その人の目の前には、人生の喜びだけが広がっているかもしれない。

誰かに必要にされていると思えるなら、生きていける。自分は誰にも必要とされていないと思うなら、生きている理由を見出せていないのと同じことだ。

ある人は、交差点の歩行者用信号が点滅し始めたら、走り始めた。別の人には、信号が点滅してもゆっくり歩いた。走った人は、制限時間内で早く回答を見つけるように教育されていた。歩いた人は、難しい問題の解決方法をじっくり考えることを重視する教育を受けていた。

自分を信じる強い意志は、魔法になる。極度のストレス状態にある人は、自分のことを信じられなくなる。自分には不幸ばかりが舞い込み、これからも不幸が続くと思う。自分には幸せになる資格がないと信じてしまう。魔法とは、個人のあやまった思い込みを解く心理療法の別名だ。

本当にやった方がいいことは、急いでやる必要のないことだし、いつやってもいいことだ。やらなくてもいいことが、義務として、命令として、スケジュールに押し寄せてくる。あんまりやる必要もないタスクをこなすことに追われた結果、やった方がいいことは後回しになる。

本当にやった方がいいことをやるためには、自分にも他人にも厳しく、かつ素直に生きていく必要がある。ルーティンワークは高速でこなすようにし、やった方がいいことをスケジュールに詰め込む。一日の予定をやった方がいいことで満たす。やらなくてもいいことを追い出すために。

頑張っている人は、自己陶醉に浸っているだけ。真に頑張っている人は、頑張っていない。少なくとも、頑張っていると意識していないし、体を緊張させてもいない。

集中している人は、集中していない。真に集中している人は、集中を意識していない。

本当に怒っている人は、怒っていないものだ。怒りわめいている人は、自分の弱さに震えているだけだ。心の底から生じる怒りは、人を立ち上がらせる。

240円で売られる牛丼の中には、牛、米、玉ねぎの命がつめこまれている。安売りされた命に尊い感謝の祈りを。たくさんの人が、安売りの牛丼から命の力を得て、明日もまた精一杯力強く生きていけますように。

牛丼が240円で売られているとする。ある動物愛護団体の人は、牛の命が安く扱われていることを嘆いた。ある宗教家は、困窮にあえぐ人たちが、牛丼の恵みで助かることを喜んだ。牛の命と人間の命、どちらに価値をおくのか。

眠ります。今から眠りにつく僕の体の中に、今日食べた動物と植物の命がめぐっている。彼らが眠っている間、僕の体に力を与え、明日、僕の命を延長させてくれることを願います。命の恵みと、死してなお動き回るその働きに感謝しつつ、眠りにつきます。ありがとう。

眠ります。今日一日食べた命の力を使って。今日一日見聞きした体験を消化する。そして明日また復活する。明日も命を食べて、自分の命を延長させる。毎日命を延長させる人生。延長戦に入りました。

頭をクリアすること。たまっているものを全て吐き出す。無駄なことは一切しない。必要な言葉のみで満ち足りること。

「所有から共有へ」がネットのトレンドなら、結婚って所有制度だと思える。父と母と子。所有の三角形。所有の愛じゃなくて、共有の愛だったら、DVとか育児ストレスとか、問題は解決しそう。所有は関係が狭くなる。共有は関係が広がる。

小説や音楽やアニメを作っても、ネットで無料でダウンロードできる環境があるから、稼げないというぼやきを聞く。お金を払ってよいと思える高品質な作品を作るか、「所有から共有へ」の流れを加速させるシステムの開発をしたらいい。所有するならお金が必要。共有するならお金は不要。

衣服も食も住まいも、仕事も娯楽品も同居人も、愛しあう人まで  
全て共有する仕組みになったら、社会は自由になる。何かを作り  
上げて、自分の所有額を増やそうとするより、みんなの共有財  
産を増やす仕事をした方がいいんじゃないか。共有財産が増え  
れば、作品が売れないと嘆くこともなくなる。

みんなが共有できる知識と物資を増やすために仕事をする。より少ないお金で、自由に生きる人が増えることを願って、未来の社会を描いていく。言葉が未来を作っていく。もう所有するのに飽きてきた。言葉を外に放とう。

現代日本では、衣食住が完備されている。食欲と性欲も、コンビニやファストフードやネットが補完してくれる。物質と情報があまりすぎて、幸福な黄金郷。1人で十分生きていけるほど安い商品が、日本の国内市場に溢れている。こんな時代、結婚して家族を作ることには意義があるだろうか。

ツンツンして暴力を振るった後に、デレっとする。これはDV行為をやめられない恋人、親の姿でもある。何故多くの人がツンデレ好きなのか？ DVする恋人や親を許し、愛してしまうのと同じ構造が、ツンデレにもあるかもしれない。

鳥インフルエンザの拡大を防止する為、愛知県で14万羽の鶏が殺処分されたという。殺処分という表現に無慈悲を感じるけれど、動物愛護団体の方は大量の家畜が死ぬことについて、どう抗議しているのだろう。グーグルで検索すればわかるのか。検索しないとわからないのか。

秋葉原の歩行者天国で規制が厳しくなる。えこひいき発覚でAKB48関係者が大バッシングにあう。2つのニュース両方の背景に「誰かの恣意的なイレギュラーを許さない」という思想がある。どこまで規制するか線引きが難しいから、一律で厳しくする。ルール逸脱者を許せない精神が拡大している。

手にした小説に苦しみと悲しみしかないというなら、それはあなたがそういう小説を引き寄せているだけ。あなたに惹かれて、その小説はやってきた。あなたがその小説を買ったのではない、小説の方こそが、あなたに魅せられたのだ。

リアルもバーチャルリアルも、脳が体験している幻想。どっちも  
変わらない。全ては真夏の夜の夢。

彼女はアマゾンに商品を頼んだ。ダンボール箱を開けたら、中に赤ん坊が入っていた。赤ん坊に桃太郎と名づけて、育てるはずもない。養育費は捻出できないし、この赤ん坊の存在は不気味だ。彼女は宅急便の会社にクレームを入れて、赤ん坊を返品した。

おじいさんが、大手通販サイトで野菜を注文した。野菜を切ったら、中から女の子の赤ん坊が出てきた。かぐや姫と名づけて育てるはずもない。おじいさんは通販サイトのコールセンターにクレームの電話を入れて、ツイッターに文句を書いた。かぐや姫になれなかった女の子は、返品された。

とある大手通販サイトの人気商品は桃である。ここ最近、届いた桃の中に、男の子の赤ん坊が入っていたという顧客からの問い合わせが頻出した。コールセンターの人たちは、最初冗談だと思った。ただ、あまりに問い合わせが多い。少子化を憂いたタイガーマスクが、桃太郎を桃に混入した？

赤ん坊を誰かの家に桃太郎として届けても、ほとんどの人は困惑する。養育費がかかる。時間もかかる。タイガーマスクの主人公伊達直人の分身たちはネット上で、桃太郎のお届け方法について協議した。心の底から子供を欲しているのに、子がいない人にだけ、桃太郎を届けることにした。

長年不妊治療をしているが、子供を授からない夫婦、40歳を過ぎてから結婚して、高齢出産が不安な夫婦に、タイガーマスクから桃が届けられた。ダンボールを開けると、男の子が入っている。桃から生まれた現代の桃太郎。一部の夫婦は喜んだが、多くの夫婦は誰の子だろうとあやしんだ。

ネット通販の宅急便の桃の中に入っている桃太郎のニュースは、匿名のネット文化が発展した日本特有の寄付行為として世界のニュースで話題になった。一人暮らしだが子を育てたいという男女から、伊達直人のところに桃太郎希望の手紙が来るようにもなった。

結婚はしたくない、セックスもやる気がしないという一人暮らしの男女の家に、次々と桃太郎の宅急便が到着した。一体この赤ん坊たちは誰の子なのか？ テレビ局が伊達直人にインタビューした。DV家庭や、シングルマザー、シングルファザーの家庭の子供たちが、桃太郎なのだという。

「子供が生まれたけれど、家庭や経済の事情で子供を育てられない人は、たくさんいます。子供が欲しいという人の元に、望まれぬ子を届けることは、新旧の親子双方にとって幸福なことのはずです」タイガーマスクの発言は、伝統的な価値観からすれば暴言である。しかし、喜ばれた。

いつもはバス停と宝くじ売り場前で見かけるホームレスが、2人ともいなかった。お正月だから実家に帰っているはずもない。年代わりを契機に引越したのか、行政から追い出されたのか、たまたま散歩していたのか、死んでしまったのか。二人同時に姿を消したことが気がかりだった。

近所にいつもホームレスがいると言うと、「治安が悪いんですね」と言われることもある。僕は毎日ホームレスの姿を見かけて、自分がホームを持って暮らしていることに心を痛めていたが、同じ事実を聞いて、治安が悪いと解釈する人もいるのだ。

僕は毎日ホームレスの姿を見て、良心の呵責を感じているだけで、別に何も社会改善活動を行っているわけではない。ホームを持って暮らしていることのせめてもの償いとして、ツイッターに事実を記録しているだけだ。微力で社会的影響力なんてかけらもないけれど、義務として書いておく。

お正月、親戚の子どもにお年玉をあげる。最近のお年玉の金額は、値上がりしているという。僕がホームレスだとしたら、お年玉をあげることもできないだろう。

正月姿を見かけなかったホームレスのおじさんを今日ようやく見かけた。宝くじ売り場の前に、背中を大きく曲げて座っていた。座り眠りなのか寒くて苦しいのか。いつもバス停に座っているホームレスのおじさんは今日もいなかった。正月に引っ越したのか、死んでしまったのか。

ホームレスがいつも座っている歩道が、工事中になった。歩道は柵で囲われた。歩行者は道路に作られた臨時の歩道を通る。爆音を立てる工事車両の合間に、ホームレスの荷物があつた。荷物の横、立ち入り禁止区域の中に、ホームレスのおじさんが座っていた。

ホームレスの横を工事現場の作業員が通る。掘削作業もしている。危ないのではないか。しかし、おじさんはいつも通り背中を丸めて死体みたいに座っている。作業員が「どいてください」と頼んでも、どかないのだろうか。そもそも、人間として扱われていないのだろうか。

看板には、20時から翌朝遅くまで夜間工事と書かれている。2月中旬まで、1ヶ月近く下水道の工事があるようだ。ホームレスのおじさんは、夜に爆音が響く工事現場に、何日も佇むのだろうか。

翌日、工事現場は移動していた。ホームレスのおじさんはいつもの場所に座っている。工事が行われても、どかなかったということは、彼にとってはあの歩道が家なのだ。どこでもよいのではなかった。ホームレスではなかった。宝くじ売り場の前が、彼の定位置、ホームなのだ。彼の信念を見た。

家の前で工事が行われてもうるさいなと思うだけ。引っ越そうとは思わない。ホームレスの彼にとっても、その想いは同じだったのだ。誤解していた。歩道がホームだった。自分の寝場所が立ち入り禁止地帯として囲われても、どかない信念、強さ。ホームレスで生きると選択した強さ。決意。